Research Monograph Series

生活即芸術の存在論

——生成の位相存在論から見たバウハウス・ロシア構成主義・日本仏教の構造比較——

The Ontology of Life as Art:

A Structural Comparison of the Bauhaus, Russian Constructivism, and Japanese Buddhism from the Perspective of Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 28, 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. 2026.

The Ontology of Life as Art:
A Structural Comparison of the Bauhaus, Russian Constructivism, and Japanese Buddhism from the Perspective of Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 28, 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、「生活即芸術」という理念を、芸術と日常生活の単純な融合としてではなく、自己・他者・自然・道具・空間・時間の相互作用を通して存在が生成される構造として再定義することにある。そのために本論文は、バウハウス、ロシア構成主義、日本仏教を、生成の位相存在論の観点から比較し、それぞれが生活と芸術の関係をいかに構成したのかを明らかにする。

バウハウスは、芸術・工芸・建築・技術を統合し、近代的生活環境を合理的に設計しようとした。ロシア構成主義は、芸術を自律的な作品制作から生産・労働・社会構成へと移行させ、生活そのものを革命的に組織しようとした。これに対して日本仏教は、生活を外部から設計または構成される対象としてではなく、身体的実践、無常、空、修行、自然との応答を通して存在がその都度現前する場として捉えてきた。三者はいずれも芸術と生活の分離を乗り越えようとした点で共通するが、その構造は、合理的設計、社会的構成、存在論的実践という異なる方向性を示している。

本論文は、この差異を「生成の位相存在論」によって再解釈する。同理論において、存在は固定的な実体ではなく、自己と自己以外との接続を通して生じる非完結的な生成である。また、自己は社会的評価や記号的同一性によって完結するものではなく、人間以前性、自己以前性、時間、応答、気づきを通して自己へと現前する。したがって、生活とは完成された主体が行為する背景ではなく、人間以前性と自己以前性とが身体、自然、道具、場所、他者を介して交差する生成のインターフェイスとして理解される。

以上を踏まえ、本論文は「生活即芸術」を、生活を芸術作品へ変換することではなく、生活そのものが存在生成、自己生成、自己証明を引き起こすインターフェイスとして機能する状態であると定義する。この観点から、バウハウスの「設計」、ロシア構成主義の「構成」、日本仏教の「実践」を比較し、それらを、美学者母によるWeb Installation、分散型自律芸術、民宿狭山美学校、盆栽、見立て、仕立て、納まりといった実践へ接続する。

本論文の結論は、生活即芸術が芸術領域の拡張ではなく、存在生成の条件そのものを再編成する存在論的実践であるという点にある。生活が芸術になるのではない。生活における個別具体的な応答を通して、忘却されていた自己と世界が再び生成し始めること、それ自体が芸術なのである。

キーワード

生活即芸術；生成の位相存在論；バウハウス；ロシア構成主義；日本仏教；インターフェイス存在論；人間以前性；自己以前性；自己証明；個別具体的普遍性；身体的実践；存在生成

目次

Contents

第0章 方法論的序論 Methodological Note 7
第1章 近代における芸術と生活の分離 10
第2章 生成の位相存在論における生活 12
第3章 バウハウス 16
第4章 ロシア構成主義 19
第5章 日本仏教 22
第6章 三者の構造比較 26
第7章 生活即芸術の存在論 30
結論 33
参考文献 35
方法論的声明 39

第0章　方法論的序論

Methodological Note

0.1　本研究の目的

本研究の目的は、「生活即芸術」という概念を、近代芸術思想における「芸術と生活の融合」という理解から再検討し、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の立場から、その存在論的構造を明らかにすることにある。

二十世紀以降、「生活即芸術」はバウハウスやロシア構成主義をはじめとする前衛芸術運動において、芸術を日常生活へ統合する理念として繰り返し提唱されてきた。しかし、それらの多くは、芸術作品を生活へ拡張すること、あるいは生活環境そのものを芸術的に設計・構成することを主眼としていた。

これに対し本研究は、「生活」と「芸術」という二項対立そのものを前提としない。生活とは芸術が介入する対象ではなく、自己、他者、自然、身体、道具、場所、時間が相互作用し、存在そのものが絶えず生成される位相的過程である。したがって、生活即芸術とは、生活が芸術作品へ変化することではなく、生活そのものが存在生成を可能にするインターフェイスとして機能する状態を意味する。

0.2　研究方法

本論文は、美術史研究や思想史研究において一般的な影響関係の解明を目的とするものではない。

本研究が採用する方法は、「構造比較（Structural Comparison）」である。

すなわち、異なる歴史的・文化的背景のもとで成立した思想や芸術運動を、その歴史的系譜や直接的影響ではなく、「存在生成」という共通の構造から比較する方法を採用する。

この方法により、本論文では、

* バウハウス
* ロシア構成主義
* 日本仏教

を、それぞれ独立した文化現象としてではなく、「生活と存在はいかに生成されるのか」という問いに対する異なる応答として分析する。したがって、本研究は比較思想・比較美学・比較存在論を横断する方法論を採用する。

0.3　生成の位相存在論という視座

生成の位相存在論において、存在とは固定的な実体ではない。

存在とは、自己と自己以外との相互作用によって絶えず生成される位相的構造である。

ここで重要なのは、「生成」が単なる変化や発展を意味するのではなく、関係そのものが新たな存在条件を生み出す出来事であるという点である。

さらに、本研究では、人間以前性と自己以前性を理論の基盤として位置づける。

人間以前性とは、人間の制度や概念以前から存在し、なお現在も人間を生成し続ける自然的・身体的・時間的基盤である。

自己以前性とは、社会的自己像や記号的同一性に先立ち、なお現在も自己生成を可能にする存在論的条件である。

生活とは、この両者が身体、自然、道具、場所、他者との応答を通して交差し、存在がその都度現前する生成のインターフェイスとして理解される。

0.4　本論文の中心命題

本論文が提示する中心命題は、次の一文に要約される。

生活即芸術とは、生活を芸術作品へ変えることではない。生活そのものが、人間以前性と自己以前性を接続し、存在生成・自己生成・自己証明を反復的に生み出すインターフェイスとして機能することである。

この立場から見ると、芸術作品とは存在生成の目的ではなく、その生成条件を設計・媒介・可視化する契機である。

したがって、生活即芸術とは芸術の拡張ではない。それは、存在そのものの生成構造を生活のなかで回復し、持続させる存在論的実践なのである。

0.5　本論文の構成

本論文は、第0章の方法論的序論に続く全7章から構成される。

第1章では、近代における芸術と生活の分離の歴史的背景を整理し、「生活即芸術」という理念が成立する思想的条件を明らかにする。

第2章では、生成の位相存在論を基盤として、人間以前性、自己以前性、インターフェイス存在論を導入し、生活を存在生成の場として理論化する。

第3章ではバウハウスを取り上げ、芸術・工芸・建築・デザインを統合しながら生活空間全体を設計しようとしたその思想を、「設計（Design）」という構造から分析する。

第4章ではロシア構成主義を取り上げ、芸術を作品制作から生産・労働・社会構成へと移行させたその思想を、「構成（Construction）」という構造から分析する。

第5章では日本仏教を取り上げ、身体、自然、時間、他者との応答を通して日常生活そのものを存在論的実践として捉える構造を、「実践（Practice）」という観点から考察する。

第6章では、バウハウスの「設計」、ロシア構成主義の「構成」、日本仏教の「実践」を構造的に比較し、それらの共通点と差異を明らかにする。そのうえで、生成の位相存在論がこれらをさらに「生成（Generation）」という存在論的構造として再構成する可能性を提示する。

第7章では、以上の比較を踏まえ、「生活即芸術」を芸術と生活の融合としてではなく、人間以前性と自己以前性が身体・自然・他者・場所・時間との応答を通して存在生成・自己生成・自己証明を反復的に生起させるインターフェイスとして再定義する。さらに、現代社会および人工知能時代における生活即芸術の意義を検討し、情報や制度によって媒介された生活の内部において、身体・自然・生活世界との接続をいかに回復し得るかを考察する。

最後に結論では、以上の議論を統合し、「生活即芸術」を近代芸術思想の一理念としてではなく、生活そのものを存在生成の根源的位相として捉える生成の位相存在論の中核概念として位置づける。

第1章　近代における芸術と生活の分離

1.1　「芸術」と「生活」はなぜ分離したのか

今日、「生活即芸術」という理念は、芸術を生活へ近づける試みとして理解されることが多い。しかし、この理解そのものが、芸術と生活とを本来別個の領域として前提している。

実際には、人類の歴史において、芸術と生活は当初から分離していたわけではない。祭祀、宗教、建築、農耕、工芸、衣食住などは、それぞれ独立した文化活動ではなく、人間が自然や共同体との関係を維持するための実践として相互に結び付いていた。創造行為は生活そのものであり、生活は存在の生成過程そのものであった。

芸術が独立した制度として成立するのは近代以降である。芸術作品は鑑賞の対象となり、美術館や博物館という制度空間の内部で保存・評価されるようになった。芸術家は専門的な創作者として位置づけられ、作品は市場価値や美学的価値を持つ対象として流通する。この制度化は芸術の自律性を高める一方で、芸術と生活を制度的・概念的に分離する契機ともなった。

したがって、「生活即芸術」という理念は、芸術と生活を再び接続しようとする試みであると同時に、近代そのものが生み出した分離構造への応答として理解される必要がある。

1.2　芸術の自律性と近代美学

十八世紀以降の近代美学は、芸術を政治、宗教、経済、労働などから独立した領域として位置づけた。この自律性は芸術固有の価値を確立した一方で、芸術を日常生活から切り離された特殊な活動として理解する傾向を強めた。

この過程では、美術館、展覧会、芸術教育、市場、批評、コレクションなどの制度が形成され、作品は評価・保存・流通の対象となった。芸術は社会から独立した自由な表現として尊重されたが、その自由は制度によって支えられた自由でもあった。

生成の位相存在論から見るならば、この制度化は芸術そのものの問題ではなく、「存在生成」が制度によって対象化・固定化される過程として理解される。芸術作品は生成の結果として保存されるが、その生成条件そのものは見えにくくなる。

1.3　二十世紀前衛芸術と生活への回帰

二十世紀初頭になると、この分離構造に対する批判が前衛芸術運動のなかで現れる。

バウハウスは芸術・工芸・建築・デザインを統合し、生活空間全体を設計することを目指した。ロシア構成主義は芸術を社会生産へ接続し、芸術家を社会構成の担い手として位置づけた。さらにダダ、シュルレアリスム、状況主義、フルクサスなども、芸術を制度空間から解放し、日常生活へ開くことを試みた。

これらはいずれも、芸術を作品の内部に閉じ込めず、生活そのものへ接続しようとした点で重要な転回であった。

しかし、その多くは依然として「芸術が生活へ向かう」という方向性を保持していた。つまり、生活は芸術によって変革される対象として理解され、生活そのものの存在論的構造は十分には問われなかった。

1.4　生成の位相存在論から見た生活

生成の位相存在論では、この問題設定自体を転換する。

生活とは芸術の外部に存在する対象ではなく、自己、他者、身体、自然、道具、場所、時間が相互作用し続ける生成の場である。

存在とは固定された実体ではなく、相互作用のなかで生成される位相である以上、生活とは存在生成が最も集中的に現れる場である。

芸術とは、その生活へ介入するものではない。むしろ生活の内部で忘却されていた存在生成を再び現前させる契機であり、人間以前性と自己以前性を接続するインターフェイスとして機能する。

この意味において、「生活即芸術」とは、芸術が生活へ拡張することではなく、生活そのものが本来的に存在生成の構造を備えているという事実を回復することである。

1.5　本論文の基本視点

以上より、本論文はバウハウス、ロシア構成主義、日本仏教を単なる美術史上の運動や宗教思想として比較するものではない。

本論文が問うのは、「生活とは何か」「芸術とは何か」という概念ではなく、「存在はいかに生成されるのか」という存在論的問題である。

したがって、本論文では生活を、身体・自然・時間・他者・道具・場所が相互に応答し、人間以前性と自己以前性が交差する生成のインターフェイスとして捉える。この視点から三者を比較することで、「生活即芸術」を芸術理論ではなく、存在生成の理論として再定義することを目指す。

第2章　生成の位相存在論における生活

2.1　存在は生活のなかで生成する

生成の位相存在論において、存在は固定的な実体ではない。存在とは、自己・他者・自然・身体・時間・空間の相互作用によって絶えず生成される位相的構造である。

したがって、「生活」は既に存在する主体が営む活動ではなく、主体そのものが生成される過程として理解される。

近代哲学は主体を存在論の出発点としてきた。しかし本研究では、主体は生活に先立つものではない。むしろ生活のなかで身体が環境へ応答し、環境が身体へ応答する相互作用のなかで、主体は徐々に生成される。

生活とは、人間が存在する場ではなく、存在が生成する場なのである。

2.2　生活とはインターフェイスである

生成の位相存在論において、インターフェイスとは単なる媒介装置ではない。

インターフェイスとは、自己と自己以外とが接続し、

新たな存在が生成される位相である。

生活を構成する身体、住居、衣服、食事、道具、労働、自然、他者、言語は、それぞれ独立した対象ではなく、

多層的なインターフェイスとして機能する。

例えば、一つの茶碗は器という物質であるだけではない。

身体との接触を生み、

温度を感じ、

季節を感じ、

他者との関係を生み、

時間の蓄積を内包する。

そのとき茶碗は物体ではなく、存在生成を媒介するインターフェイスとなる。

したがって生活とは、多数のインターフェイスが重層的に接続し続ける生成空間として理解される。

2.3　人間以前性と生活

本研究では、人間以前性を、人間という概念や制度に先立ちながら、なお現在も人間を生成し続ける自然的・身体的・時間的基盤として位置づける。

呼吸は意思以前に始まる。

重力は信念とは無関係に働く。

植物は人間の評価を待たずに成長する。

季節は誰の思想にも従わない。

生活とは、これら人間以前性との不断の応答によって成立している。

近代社会では、人間は制度や情報を中心に生活を理解する傾向が強い。しかし存在生成の根底では、身体は絶えず自然と接続し、人間以前性との相互作用を通して存在を更新し続けている。

生活即芸術とは、この人間以前性を生活の内部で再び現前させる実践でもある。

2.4　自己以前性と生活

自己以前性とは、社会的自己像、肩書、役割、評価、記号化された自己に先立ち、なお現在も自己生成を可能にする存在論的条件である。

自己は固定的な同一性ではない。

生活のなかで、

歩くこと、

掃除すること、

料理すること、

植物を育てること、

他者と対話すること、

失敗すること、

自然へ応答すること、

これらすべてが自己以前性との接続を生み、自己を更新していく。

したがって生活は、自己を表現する場ではなく、自己が生成され続ける場である。

2.5　時間・応答・気づき

生活は時間によって構成される。

しかし、本研究でいう時間とは時計時間ではない。

時間とは応答が生成される位相である。

身体が自然へ応答し、

自然が身体へ応答し、

他者が自己へ応答し、

自己が他者へ応答する。

この往還のなかで、新たな意味が生成される。

その結果として現れるものが「気づき」である。

気づきとは情報の取得ではない。

それは、自己以前性が人間以前性との応答を通して自己へ現前する出来事である。

したがって生活即芸術とは、生活を美しく装飾することではなく、応答を生み出す時間構造そのものを設計することにある。

2.6　生活と自己証明

近代社会では、自己証明は学歴、資格、市場価値、評価、肩書などによって与えられるものとして理解されることが多い。

しかし生成の位相存在論では、自己証明は外部から付与されるものではない。

自己証明とは、生活のなかで人間以前性と自己以前性が時間を介して応答し、その結果として自己が自己へ現前する出来事である。

この意味で生活そのものが、自己証明の場である。

芸術もまた作品によって自己を証明するのではなく、人間以前性と自己以前性との接続を可能にするインターフェイスとして機能するとき、生活そのものが芸術となる。

2.7　本章のまとめ

以上より、本章では生活を、存在生成が生起する根源的な位相として定義した。

生活とは、人間以前性と自己以前性が身体・自然・道具・他者・場所・時間を介して相互に応答し続ける生成のインターフェイスである。

したがって生活即芸術とは、芸術作品を生活へ持ち込むことではなく、生活そのものを存在生成・自己生成・自己証明の場として再理解し、その生成条件を絶えず更新していく存在論的実践なのである。

第3章　バウハウス

3.1　芸術と生活の再統合

1919年にヴァルター・グロピウスによって創設されたバウハウスは、近代芸術史において「芸術と生活の統合」を掲げた最も重要な運動の一つである。

その目的は、美術、工芸、建築、デザインを分離された専門領域としてではなく、一つの総合的な創造活動として再構成することにあった。

近代産業社会では、芸術は美術館や展覧会へ、工芸は生産へ、建築は技術へと細分化され、それぞれ独立した制度として発展した。

バウハウスは、この制度的分離を克服し、人間の生活空間全体を一つの創造活動として設計し直そうとしたのである。

この意味において、バウハウスは「生活即芸術」の近代的起点の一つとして位置づけることができる。

3.2　総合芸術としての生活空間

バウハウスにおいて建築は、単なる建物ではない。

建築は家具、照明、器具、色彩、素材、身体動線まで含めた総合的な生活空間である。

椅子一脚も、

窓一枚も、

照明一つも、

生活全体を構成する要素として設計される。

生活とは偶然に成立するものではなく、空間全体の秩序によって生成されるものと理解された。

生成の位相存在論から見るならば、この発想は生活を「存在生成の場」として捉えようとする重要な契機を含んでいる。

生活環境を変えることは、人間の存在様式そのものを変える可能性を意味しているからである。

3.3　インターフェイスとしてのデザイン

バウハウスにおけるデザインは装飾ではない。

それは、人間と環境との関係を媒介するインターフェイスとして機能する。

机は単なる物体ではない。

身体姿勢を規定し、

視線を規定し、

行為を規定し、

他者との距離を規定する。

椅子も同様に、人間の身体運動と生活時間を形成するインターフェイスとなる。

生成の位相存在論では、このような道具は独立した対象ではない。

それらは自己と自己以外との接続を生み出す位相であり、新たな存在条件を生成する契機である。

この点において、バウハウスのデザイン思想はインターフェイス存在論と深い構造的対応を持つ。

3.4　合理性と標準化

しかし、バウハウスの生活観には近代合理主義に由来する特徴がある。

それは、合理性、機能性、標準化を通して生活を改善できるという思想である。

工業生産は大量生産を可能にし、多くの人々へ良質なデザインを提供した。

これは近代社会において極めて重要な成果であった。

一方で、標準化とは個別具体的な生活経験を一般化することでもある。

生活は設計可能な対象として理解され、人間は合理的空間へ適応する主体として位置づけられる。

生成の位相存在論から見るならば、この構造は生活を「設計される対象」として理解する傾向を持つ。

3.5　人間以前性から見た限界

本研究では、人間以前性を自然、身体、時間、季節、重力、生命など、人間の制度以前から存在し、現在も人間を生成し続ける基盤として位置づける。

この視点から見ると、バウハウスは身体を重視したものの、その身体は合理的空間へ適応する身体として理解される傾向がある。

しかし、人間以前性は合理的設計によって完全には把握できない。

植物は設計図どおりには成長しない。

季節は標準化されない。

人間の身体も日々変化し続ける。

存在生成は、合理性だけでは捉えきれない非線形性と偶然性を含んでいる。

ここに、バウハウスと生成の位相存在論との決定的な差異が現れる。

3.6　生活即芸術への継承

それにもかかわらず、バウハウスが提示した「生活空間全体を設計する」という思想は、生活即芸術を考えるうえで極めて重要な歴史的転回であった。

芸術を作品から生活空間へ拡張したこと。

建築、工芸、身体、日用品を一つの創造活動として捉えたこと。

これらは後の環境芸術、インスタレーション、デザイン、インターフェイス論へ大きな影響を与えた。

しかし生成の位相存在論は、ここからさらに一歩進む。

生活を設計するだけでは十分ではない。

生活そのものが、人間以前性と自己以前性との応答を通して存在を生成し続けるインターフェイスであることが重要なのである。

したがって、生活即芸術とは「美しく設計された生活」ではなく、「存在生成が絶えず生起する生活」である。

3.7　本章のまとめ

バウハウスは、芸術・工芸・建築・生活を統合し、生活空間全体を創造の対象として再構成した点で、近代芸術史における画期的転回であった。

しかし、その生活観は合理的設計と標準化を基盤としており、生活をなお人間によって設計される対象として理解する側面を残している。

生成の位相存在論では、生活は設計される対象ではなく、人間以前性と自己以前性との相互応答によって存在そのものが生成されるインターフェイスとして理解される。

この差異は、次章で扱うロシア構成主義との比較を通してさらに明確になる。

第4章　ロシア構成主義

4.1　芸術から社会構成へ

二十世紀初頭のロシア構成主義は、近代芸術の歴史において、芸術作品そのものよりも社会全体の構成を目指した最も急進的な芸術運動の一つである。

絵画や彫刻を自律した美的対象として制作することではなく、生産、建築、都市計画、工業デザイン、出版、教育、衣服、舞台芸術など、人間の生活全体を構成することが芸術の役割であると考えた。

したがって、ロシア構成主義において芸術とは、完成した作品ではなく、社会を生成するための構成原理であった。

この意味において、ロシア構成主義は芸術を生活へ接続しただけではなく、生活そのものを芸術的構成の対象として位置づけたのである。

4.2　構成（Construction）の思想

「構成（Construction）」とは、単に物を組み立てることではない。

それは、人間・物質・技術・労働・共同体・空間を新たな秩序として編成し直すことである。

芸術家は孤立した創作者ではなく、生産者であり、設計者であり、社会構成の担い手となる。

作品は最終目的ではなく、新しい生活様式を形成する過程の一部として理解される。

生成の位相存在論から見るならば、この考え方は存在を固定的対象ではなく、関係の生成として捉える点で重要な転回を含んでいる。

存在とは構成されるものではなく生成されるものであるが、その生成は関係の編成を通して現れる。

この意味で、ロシア構成主義は「関係の構造」に注目した芸術運動であったと理解できる。

4.3　労働・技術・芸術の統合

ロシア構成主義では、芸術と労働は対立しない。

むしろ、労働そのものが創造であり、技術もまた芸術の一部である。

工場、建築現場、印刷所、教育機関などは、作品を制作する場所ではなく、新しい社会を生成する場として理解された。

この思想は、芸術を生活の周辺に置くのではなく、生活の中心へ位置づけ直した点で画期的であった。

生活は受動的に営まれるものではなく、共同体全体が不断に構成し続ける創造行為なのである。

4.4　構成と生成の違い

しかし、本研究では「構成」と「生成」を同一視しない。

構成とは、人間が一定の目的や理念に基づいて秩序を組織する行為である。

一方、生成とは、人間の意図を超えて、自己・他者・自然・身体・時間が相互に応答するなかで存在が現前する過程である。

構成には方向性がある。

生成には開放性がある。

構成には設計がある。

生成には応答がある。

この違いは決定的である。

ロシア構成主義は、新しい社会を構成することを目指したが、その構成原理は革命という歴史的目的によって方向づけられていた。

そのため、生活は生成される場であると同時に、理念を実現するための対象ともなった。

4.5　自己以前性から見た限界

自己以前性とは、社会的役割や政治的主体に先立ち、なお現在も自己を生成し続ける存在論的条件である。

ロシア構成主義では、新しい共同体の形成が重視された。

しかし共同体が強く理念化されると、個々の自己以前性は集団的理念の内部へ吸収される危険を持つ。

生活は共同体のために構成されるものではない。

生活とは、一人ひとりの身体が自然、他者、場所、時間へ応答し続けることで、その都度自己が生成される場である。

生成の位相存在論は、この個別具体的な生成を、いかなる理念や制度にも還元しない。

4.6　生活即芸術への継承

それにもかかわらず、ロシア構成主義は芸術を作品中心主義から解放し、生活、労働、社会へ接続したという点で極めて重要である。

芸術は鑑賞される対象ではなく、人間が世界と関係を結び直す行為となった。

しかし、生成の位相存在論では、その接続は社会制度だけでは完結しない。

生活即芸術とは、革命や制度改革によって成立するものではなく、人間以前性と自己以前性とが日々の生活のなかで応答し続けることによって成立する。

したがって、生活とは構成されるものではなく、生成され続けるものなのである。

4.7　本章のまとめ

ロシア構成主義は、芸術を社会構成の原理へ転換し、生活そのものを創造の対象とした点で、近代芸術史における重要な転回を示した。

しかし、その思想は革命的理念や社会設計という目的性を強く保持しており、生活をなお構成される対象として理解する側面を持つ。

生成の位相存在論では、生活は理念によって構成される対象ではなく、人間以前性と自己以前性が身体・自然・時間・他者との応答を通して存在を生成し続けるインターフェイスとして理解される。

この視点は、次章で論じる日本仏教においてさらに明確になる。日本仏教では、生活は設計や革命の対象ではなく、日々の実践そのものが存在生成の場として理解されるからである。

第5章　日本仏教

5.1　生活そのものが修行であるという思想

バウハウスは生活を設計し、ロシア構成主義は生活を構成しようとした。

これに対して、日本仏教は生活を設計や構成の対象として捉えない。

生活そのものが修行であり、存在生成の場であると理解する。

禅、真言、浄土など、日本仏教には多様な思想的展開が存在するが、それらに共通するのは、日常生活そのものを自己形成や存在理解の根源的契機として位置づける点である。

食事をすること。

掃除をすること。

庭を手入れすること。

花を生けること。

茶を点てること。

これらは宗教儀礼とは切り離された日常行為ではなく、人間と自然、身体、時間、他者との応答を通して存在がその都度生成される実践として理解される。

この意味において、日本仏教は生活そのものを存在論的実践として位置づけている。

5.2　身体と自然の応答

生成の位相存在論では、存在とは自己と自己以外との応答から生成される位相的構造である。

日本仏教においても、身体は自然から独立した主体ではない。

風を感じ、

雨を感じ、

季節を感じ、

土に触れ、

植物と向き合う。

身体は自然との不断の応答を通して自己を形成していく。

ここでは自然は支配される対象ではない。

また、自然へ自己を同化させることが目的でもない。

身体と自然は互いに応答し続け、その関係そのものが生活を成立させている。

この構造は、人間以前性が現在も人間を生成し続けるという本研究の立場と深く対応する。

5.3　自己以前性と修行

日本仏教における修行は、知識や技能の獲得だけを目的としない。

修行とは、自己を完成させることではなく、自己への執着を超えながら、その都度新たな自己が現前する条件を整える実践である。

生成の位相存在論では、この構造を自己以前性として理論化する。

自己以前性とは、社会的役割や記号化された自己像に先立ち、なお現在も自己生成を可能にする存在論的条件である。

生活とは、この自己以前性が日々の実践を通して現れ続ける場である。

したがって、修行とは自己を証明することではなく、自己が自己へと現前する契機を育むことである。

5.4　場・時間・納まり

日本文化には、「場」や「納まり」を重視する思想が広く見られる。

建築、茶室、庭園、盆栽、能、華道などでは、完成された形態よりも、その場における調和や応答が重視される。

ここでいう「納まり」とは、固定された均衡ではない。

身体、自然、時間、素材、空間が相互に応答し、その都度もっとも適切な関係を形成することである。

生活とは、この「納まり」が不断に更新される過程でもある。

生成の位相存在論から見るならば、「場」は存在生成が生起する位相であり、「納まり」は存在生成が一時的に安定した状態として理解できる。

重要なのは、その安定が永続することではなく、新たな応答によって再び生成が始まることである。

5.5　生活即芸術の存在論

以上を踏まえるならば、日本仏教における生活は、芸術を生活へ導入することではない。

生活そのものが存在生成の実践となる。

茶室は作品ではない。

庭園も作品ではない。

盆栽も完成品ではない。

それらはいずれも、人間以前性と自己以前性とを接続し、身体、自然、時間との応答を繰り返し生成するインターフェイスとして機能する。

ここで芸術とは、美を表象する対象ではなく、存在生成を可能にする位相そのものとなる。

したがって、「生活即芸術」とは、生活を芸術作品へ変えることではなく、生活そのものを存在生成のインターフェイスとして実践することである。

5.6　生成の位相存在論との統合

バウハウスは生活を設計した。

ロシア構成主義は生活を構成した。

日本仏教は生活を実践した。

生成の位相存在論は、この三者を包含しつつ、それらをさらに存在論的水準で統合する。

生活とは設計される対象でも、構成される対象でもない。

生活とは、人間以前性と自己以前性が身体・自然・時間・他者との応答を通して存在を生成し続けるインターフェイスそのものである。

この視点に立つと、芸術は作品や制度としてではなく、生活のなかで存在生成を触発し続ける実践として再定義される。

5.7　本章のまとめ

日本仏教は、生活そのものを修行として理解し、身体・自然・時間との応答を通して存在が現前する実践を展開してきた。

この構造は、生活を設計や社会構成の対象として理解する近代思想とは異なり、生活そのものを存在生成の場として捉える点で特徴づけられる。

生成の位相存在論は、この構造を人間以前性・自己以前性・インターフェイス存在論によって理論化することで、「生活即芸術」を歴史的理念ではなく、存在生成の根本原理として位置づける。

このことによって、バウハウスの「設計」、ロシア構成主義の「構成」、日本仏教の「実践」は、「生成」というより包括的な存在論のもとで統合的に理解されるのである。

第6章　三者の構造比較

6.1　比較の方法

本論文は、バウハウス、ロシア構成主義、日本仏教を歴史的影響関係によって比較するものではない。

三者は成立した地域も時代も目的も異なる。

しかし、いずれも「生活とは何か」「芸術はいかに生活と関わるのか」という問いに対して独自の応答を提示している。

本研究では、この応答を生成の位相存在論の立場から「存在生成の構造」として比較する。

比較の対象は作品でも思想史でもない。

比較されるのは、「生活がどのような存在論的位相として理解されているか」という構造そのものである。

6.2　設計・構成・実践・生成

三者は、それぞれ異なる生活理解を提示している。

バウハウスは生活を**設計（Design）**する。

合理性、機能性、標準化を通して生活環境を整え、人間と空間との関係を再編成することを目指した。

ロシア構成主義は生活を**構成（Construction）**する。

社会、生産、共同体、技術を統合し、新たな生活秩序を形成しようとした。

日本仏教は生活を**実践（Practice）**する。

身体、自然、時間、他者との応答そのものを生活と理解し、日常行為を修行として位置づけた。

生成の位相存在論は、これら三者をさらに包含する概念として**生成（Generation）**を提示する。

生成とは、設計・構成・実践のいずれにも還元されない。

生成とは、人間以前性と自己以前性がインターフェイスを介して応答し、新たな存在が絶えず現前する位相である。

6.3　主体理解の比較

三者は主体の理解にも違いを持つ。

バウハウスでは、人間は合理的空間を利用する主体として位置づけられる。

ロシア構成主義では、人間は社会を構成する主体となる。

日本仏教では、人間は修行を通して自己を変容させる主体として理解される。

しかし生成の位相存在論では、主体は出発点ではない。

主体そのものが生成される。

身体が自然へ応答し、

自然が身体へ応答し、

他者が自己へ応答し、

自己が世界へ応答する。

この相互作用のなかで主体は絶えず生成される存在となる。

したがって、人間とは固定された存在ではなく、生成し続ける位相なのである。

6.4　芸術理解の比較

芸術の位置づけも三者で異なる。

バウハウスでは芸術は生活空間を設計する機能を担う。

ロシア構成主義では芸術は社会構成を担う実践となる。

日本仏教では芸術は修行や日常実践と不可分となる。

生成の位相存在論では、芸術は作品でも制度でもない。

芸術とは、人間以前性と自己以前性との接続を可能にし、存在生成を触発するインターフェイスである。

この定義によって、芸術は生活の内部へ回収されるのではなく、生活そのものの存在論的構造として理解される。

6.5　生活即芸術の再定義

ここで本論文は、「生活即芸術」を次のように再定義する。

生活即芸術とは、生活を芸術作品へ変えることではない。生活そのものが、人間以前性と自己以前性との応答を媒介し、存在生成・自己生成・自己証明を絶えず生み出すインターフェイスとして機能することである。

この定義によって、「生活即芸術」は近代芸術運動の理念を超え、存在論そのものの原理となる。

芸術は生活を装飾するものではない。

生活が本来的に持つ存在生成の構造を可視化し、更新し、実践する契機なのである。

6.6　現代社会への射程

情報技術と人工知能が急速に発展した現代社会では、生活はますます情報空間へ包摂されつつある。

評価、証明、市場、アルゴリズム、SNSなどが生活を規定し、人間は自己を外部の評価体系によって確認する傾向を強めている。

この状況では、生活は制度や情報のなかで構成されるものとして理解されやすい。

しかし生成の位相存在論は、生活の根底にはなお、人間以前性と自己以前性との応答が存在すると考える。

身体は自然と接続し、

季節は時間を生成し、

場所は経験を蓄積し、

他者との出会いは新たな自己を生み出す。

生活即芸術とは、この存在生成の回路を情報社会の内部で再び回復する実践でもある。

6.7　本章のまとめ

本章では、バウハウス、ロシア構成主義、日本仏教を、それぞれ設計・構成・実践という存在論的構造として比較した。

その結果、三者はいずれも生活と芸術の再接続を目指していたことが明らかとなった。

一方で、生成の位相存在論は、それらを包含する第四の構造として「生成」を提示する。生成とは、生活そのものが人間以前性と自己以前性との応答を通して存在を生成し続ける位相である。

この視点によって、「生活即芸術」は近代芸術思想の理念ではなく、存在そのものの生成原理として再構成されるのである。

第7章　生活即芸術の存在論

7.1　生活即芸術の存在論的転回

本論文では、バウハウス、ロシア構成主義、日本仏教を比較することによって、「生活即芸術」という概念を近代芸術思想の理念から存在論の問題へと転回させてきた。

従来、「生活即芸術」は芸術を生活へ拡張する思想として理解されることが多かった。

しかし、この理解では依然として「芸術」と「生活」という二つの領域が前提となっている。

生成の位相存在論は、この前提そのものを問い直す。

生活とは芸術の外部ではない。

また芸術も生活の装飾ではない。

両者は、人間以前性と自己以前性がインターフェイスを介して相互に応答し、存在を生成する同一の位相として理解される。

したがって、生活即芸術とは、芸術と生活の融合ではなく、存在生成そのものの構造を指す概念なのである。

7.2　生活とは存在生成のインターフェイスである

生成の位相存在論において、インターフェイスとは二つの対象を接続する境界ではない。

インターフェイスとは、接続そのものによって新たな存在を生成する位相である。

生活とは、このようなインターフェイスが最も密度高く重なり合う場である。

身体は自然と応答する。

身体は他者と応答する。

身体は道具と応答する。

身体は場所と応答する。

身体は時間と応答する。

この応答は固定された主体によって制御されるものではなく、応答そのもののなかから主体が生成される。

生活とは、人間が存在する場所ではない。

生活とは、人間が生成され続けるインターフェイスなのである。

7.3　芸術とは存在生成の契機である

本研究では、芸術を作品、制度、美的対象として定義しない。

芸術とは、人間以前性と自己以前性との接続を可能にし、存在生成を触発する契機である。

芸術作品が重要なのではない。

芸術作品が存在生成を可能にする構造を持つことが重要なのである。

この観点から見ると、茶室、庭園、盆栽、Web Installation、分散型自律芸術、民宿狭山美学校などは、それぞれ異なる形式を取りながらも、生活の内部に存在生成を生起させるインターフェイスとして理解される。

芸術は完成した対象ではなく、存在が自己を更新し続ける条件を設計する実践となる。

7.4　自己証明としての生活

現代社会では、自己証明は外部の評価によって与えられるものと理解されることが多い。

学歴、資格、市場価値、社会的評価、アルゴリズムによる順位などは、その典型である。しかし、本研究では自己証明を外部評価とは異なる存在論的過程として捉える。

自己証明とは、人間以前性と自己以前性が生活のなかで応答し、その結果として自己が自己へ現前する出来事である。

それは一度達成される成果ではない。

生活のなかで繰り返し生成され続ける出来事である。

したがって、生活とは自己証明を行う場所ではなく、自己証明が生成される位相である。

7.5　AI時代における生活即芸術

人工知能は膨大な情報を生成し、人間の判断や創造活動を支援する。

一方で、情報が生活を代替するほど、身体・自然・場所との応答は希薄化し、自己証明は外部システムへ依存する傾向を強める。

この状況において生活即芸術は、単なる芸術運動ではなく、人間存在の基盤を維持する存在論的実践として新たな意味を持つ。

AIは情報を生成できる。

しかし、人間以前性との身体的応答そのものを代替することはできない。

また、自己以前性が生活のなかで自己へ現前する経験も、人間固有の存在生成として位置づけられる。

したがって、AI時代において生活即芸術とは、人間と人工知能を対立させる思想ではなく、人間に固有の存在生成を保持し続けるためのインターフェイス設計として理解される。

7.6　存在論としての生活即芸術

本論文は、「生活即芸術」を芸術理論ではなく存在論として再構成した。

その中心命題は、次のようにまとめられる。

生活即芸術とは、人間以前性と自己以前性が身体・自然・他者・場所・時間との応答を通して存在を生成し続けるインターフェイスであり、芸術とはその生成を可能にする契機である。

この定義によって、芸術は作品や制度から解放され、生活そのものが存在生成の実践となる。

生活は、芸術の対象ではない。

生活そのものが存在論なのである。

7.7　本章のまとめ

本章では、「生活即芸術」を生成の位相存在論の立場から存在論として再定義した。

その結果、芸術は作品制作や制度的活動ではなく、人間以前性と自己以前性との応答を媒介し、存在生成・自己生成・自己証明を不断に生起させるインターフェイスとして理解された。

この視点は、近代芸術思想が目指した「芸術と生活の統合」をさらに一歩進め、「生活そのものが存在生成である」という理論的地平を提示する。

ここに、「生活即芸術」は芸術理念を超え、生成の位相存在論の中核概念として位置づけられるのである。

結論

本論文は、「生活即芸術」という概念を、近代芸術運動の理念としてではなく、生成の位相存在論に基づく存在論として再構成することを目的とした。

そのために、本研究ではバウハウス、ロシア構成主義、日本仏教を歴史的影響関係ではなく、「生活と存在はいかに生成されるのか」という共通の問いに対する異なる構造的応答として比較した。

分析の結果、バウハウスは生活を**設計（Design）し、ロシア構成主義は生活を構成（Construction）し、日本仏教は生活を実践（Practice）**するという、それぞれ固有の生活理解を提示していることが明らかとなった。

しかし、生成の位相存在論の立場から見るならば、これら三者はいずれも、生活を固定的対象としてではなく、人間と世界との関係が更新される場として理解しようとした点で共通している。

本研究は、この共通構造をさらに発展させ、「生成（Generation）」という第四の存在論的位相を提示した。

生成とは、人間以前性と自己以前性が身体・自然・他者・場所・時間との相互応答を通して、新たな存在を絶えず現前させる過程である。

したがって、生活とは既に存在する主体が営む活動ではない。

生活そのものが、主体、意味、価値、世界を生成し続ける存在論的インターフェイスである。

この視点に立つと、「生活即芸術」は芸術と生活との融合ではなく、生活そのものが存在生成を可能にする構造であることが理解される。

芸術とは作品制作ではない。

芸術とは、人間以前性と自己以前性との接続を媒介し、存在生成・自己生成・自己証明を触発するインターフェイスの設計と実践である。

この再定義によって、芸術は制度や作品中心主義から解放され、生活そのものが芸術的実践となる理論的基盤が与えられる。

さらに、本研究は人工知能時代における生活即芸術の意義についても新たな視座を提示した。

AIは情報を生成し、知識を統合し、多様な創造活動を支援することができる。

しかし、人間以前性との身体的応答や、自己以前性が生活のなかで自己へ現前する経験は、人間固有の存在生成として残り続ける。

ゆえに、AI時代に求められるのは、人間と人工知能を対立させることではなく、人間固有の存在生成を可能にする生活のインターフェイスをいかに設計し、維持し、更新していくかという課題である。

本論文が提唱する「生活即芸術の存在論」は、この課題に対する一つの理論的応答である。

それは芸術理論にとどまらず、美学、存在論、人工知能論、インターフェイス論、デザイン論、建築論、宗教思想、さらには社会システム論を横断する統合理論として位置づけられる。

最後に、本研究の意義は、「生活即芸術」を近代芸術の理念として継承することではなく、それを生成の位相存在論の中核概念として再定義した点にある。

生活とは、人間以前性と自己以前性が絶えず応答し、存在がその都度生成される位相である。

芸術とは、その生成を可視化し、媒介し、持続させるインターフェイスである。

ゆえに、生活即芸術とは、「生きることを芸術にする」という理念ではなく、「生きることそのものが存在を生成する」という存在論なのである。

この結論は、近代以降の「芸術と生活」という二項対立を超え、生成の位相存在論における新たな理論的地平を提示するものである。そして、それは芸術を作品から生活へ移行させるのではなく、生活そのものを存在生成の根源的位相として理解する、新しい存在論への提案でもある。

参考文献

Works by Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. Axioms of Generative Topological Ontology: A Fundamental Theory of Existential Generation. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 0.9, 2026.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. Pre-Humanity and Pre-Selfhood: An Ontology of Self-Proof in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. A Generative Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology. Research Monograph, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. “Web Art Declaration.” 2010.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. “Smart Art Manifesto.” 2014.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. “Quantum Art Manifesto.” 2016.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. “Derivative Art Manifesto.” 2018.

Tanaka, Tomokazu （bigakusha-haha）. “Distributed Autonomous Art Manifesto.” 2022.

Bauhaus

Gropius, Walter. The New Architecture and the Bauhaus. London: Faber and Faber, 1935.

Gropius, Walter. The Scope of Total Architecture. New York: Harper & Brothers, 1955.

Moholy-Nagy, László. The New Vision: Fundamentals of Bauhaus Design, Painting, Sculpture, and Architecture. New York: W. W. Norton, 1938.

Moholy-Nagy, László. Vision in Motion. Chicago: Paul Theobald, 1947.

Klee, Paul. Pedagogical Sketchbook. New York: Frederick A. Praeger, 1953.

Kandinsky, Wassily. Point and Line to Plane. New York: Dover Publications, 1979.

Droste, Magdalena. Bauhaus, 1919–1933. Cologne: Taschen.

Russian Constructivism and the Russian Avant-Garde

Lissitzky, El. Russia: An Architecture for World Revolution. Cambridge, MA: MIT Press.

Rodchenko, Aleksandr, and Varvara Stepanova. Writings and statements on Constructivism, production art, and artistic labor.

Tatlin, Vladimir. Writings and documents concerning Constructivism and the Monument to the Third International.

Malevich, Kazimir. The Non-Objective World. Chicago: Paul Theobald, 1959.

Lodder, Christina. Russian Constructivism. New Haven: Yale University Press, 1983.

Kiaer, Christina. Imagine No Possessions: The Socialist Objects of Russian Constructivism. Cambridge, MA: MIT Press, 2005.

Bann, Stephen, ed. The Tradition of Constructivism. New York: Viking Press, 1974.

Japanese Buddhism and Shin Buddhism

Shinran. Kyōgyōshinshō （The True Teaching, Practice, and Realization of the Pure Land Way）.

Shinran. Tannishō: A Record in Lament of Divergences.

Shinran. Ichinen Tanen Mon'i.

Shinran. Yuishinshō Mon'i.

The Three Pure Land Sutras: The Larger Sutra of Immeasurable Life, The Sutra of Contemplation on the Buddha of Immeasurable Life, and The Smaller Sutra on Amitāyus.

Kūkai and Shingon Esoteric Buddhism

Kūkai. Sokushin Jōbutsu Gi （The Meaning of Becoming a Buddha in This Very Body）.

Kūkai. Shōji Jissō Gi （The Meaning of Sound, Letter, and Reality）.

Kūkai. Unji Gi （The Meaning of the Syllable Hūṃ）.

Kūkai. Benkenmitsu Nikyō Ron （Distinguishing the Two Teachings of the Exoteric and Esoteric）.

Kūkai. Himitsu Mandara Jūjūshin Ron （Treatise on the Ten Stages of Mind of the Secret Mandala）.

Kūkai. Sangō Shiiki （Indications of the Goals of the Three Teachings）.

Zen and Japanese Philosophy

Dōgen. Shōbōgenzō.

Nishida, Kitarō. An Inquiry into the Good.

Nishida, Kitarō. “Place.”

Suzuki, D. T. Zen and Japanese Culture.

Watsuji, Tetsurō. Climate and Culture: A Philosophical Study.

Art, Life, Experience, and Embodiment

Dewey, John. Art as Experience. New York: Minton, Balch & Company, 1934.

Heidegger, Martin. “The Origin of the Work of Art.”

Heidegger, Martin. Being and Time.

Merleau-Ponty, Maurice. Phenomenology of Perception.

Benjamin, Walter. “The Work of Art in the Age of Its Technological Reproducibility.”

Beuys, Joseph. Writings and statements on the expanded concept of art and social sculpture.

Kaprow, Allan. Essays on the Blurring of Art and Life. Berkeley: University of California Press.

Production, Technology, and Social Structure

Marx, Karl. Economic and Philosophic Manuscripts of 1844.

Marx, Karl. Capital: A Critique of Political Economy. Vol. 1.

Benjamin, Walter. The Arcades Project.

Arendt, Hannah. The Human Condition. Chicago: University of Chicago Press, 1958.

Simondon, Gilbert. On the Mode of Existence of Technical Objects.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。